

# わが心の自叙伝

## 菅原洋一

.....▷11

スキー場で。筆者と妻のアケミさん



タンゴ喫茶には珍しい若い女性客からラテンの「ある恋の物語」をリクエストされてから、私の「ある恋の物語」はスタートした。といっても、彼女はそれから2年ぐらいは、時々母親らしき女性（それは叔母さんだった）と店にやってくるぐらいだった。

新宿の「ラ・セーヌ」という店で歌っているとき、ついに彼女が初めて一人で歌を聞きに来た。短大生の頃だ。私とは七つ年が違ったからまるで妹のような存在で、彼女もまたいつの頃からか「お兄ちゃん」と呼んでいた。私も彼女のことを「アケミ」と呼び捨てにして、実際の兄妹のような付き合いが始まった。周りにも「妹だよ」と紹介していたから、ゴールインするまでほんとうの兄妹だと信じていた人がたくさんいたぐらいだった。その兄妹のような関係が、や

### 私の「ある恋の物語」

がて恋人となり伴侶として一生を共にすることになるわけだが、その道のりは実に多難なものだった。

2人とも、どの時点で恋人となり、どの時点で結婚を意識したのか、あまり覚えていないのだが、私はなんとなく結婚を決意したときのことを覚えていた。

あれは確か、私が代々木上原に住んでいた頃だったが、ある日のこと風邪をひき、扁桃腺を腫らしてしまい40度もの高熱にうなされたことがあった。そのとき彼女は鍋や包丁、まな板まで持ってきて、狭い私の部屋で料理を作り、看病してくれたのだ。その後ろ姿を見ながら、「こ

の娘を嫁さんにしようかな」と思った。

しばらくして、本気で結婚しようと考え出した。そこで真つ先に彼女の親に承諾を得に行つた。ところが、まるつきり取り合ってくれないのだ。

よくよく考えてみれば分かる。20歳まで大事に育てた娘を、不安定な歌手という生活をしなから「いつかは大歌手になつて

やるて、夢だけを追い続ける、そんな無名歌手の男と、もう手を挙げて結婚を許す親などいるはずがない。

でも当時は夢だけで生きていく。そんな若さがあった。いつかは成功するとうい甘い考えこそ、若さの特権でもあったのだ。

しかし彼女の家のなかでは、私がお家を訪れてからというもの、冷たい戦争が始まっていた。親

と娘の敵しく激しい対立だ。そんな状態が半年も続いた。何度か彼女も決意がぐらつきそうになったと言いが、「やっぱりこの人についていきたい」と思い、お父さんにある日、話を切り出した。

そのとき、お父さんがこう告げたという。「おまえのような娘は勘当だ」。ドラマや映画の中ではよく出くわすせりふではあるが、実際にうちの嫁さんはそのせりふを浴びたのだ。その瞬間、彼女は一気にたがのようなものの外れた。お父さんも悲しい決断だったに違いない。しかし、もう私には彼女を幸せにするしか方法がなかった。

今、たとえ反対でも後々、「一緒にさせてよかった」と思ってくれるようにならなければいけないのだ。その決意を心に私たちはある実行を試みた。駆け落ちしたのである。1962（昭和37）年夏、暑い日だった。（すがわら・よういち＝歌手）

# 結婚を反対され駆け落ち